

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム 報告書

全米高校模擬国連大会への日本代表団派遣



2009年6月
グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms

目次

1. はじめに	1
2. グローバル・クラスルームとは	2
3. 模擬国連委員会とは	3
4. 推薦の言葉	4
5. 企画概要	5
6. 派遣報告	6
7. 受賞	6
8. 参加者報告	11
9. 支援団体一覧	24
10. 会計報告	24
11. グローバル・スポンサー メリルリンチ社	25
12. グローバル・クラスルーム日本委員会	25
13. おわりに	26
14. 参考	26

はじめに

この度、全米高校模擬国連大会への3回目の日本代表団派遣事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご協賛いただいたメリルリンチ日本証券様・武田薬品工業様をはじめ、ご後援いただいた関係省庁・団体等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業には、2008年11月8-9日に東京の国連大学で行われた、第2回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた5校10名の高校生が参加いたしました。そして、日本代表団は中央アフリカ共和国の大天使として、世界20カ国、総勢約2200名の参加者を前に今大会においても見事な存在感を発揮してきました。

本報告書からもわかるように、参加した高校生たちがこの事業を通して得たものは、会議での結果以上に、一人ひとりが全米大会という舞台で真剣に取り組み・本気で挑戦したという経験にあったのだと思います。会議で思うようにいかなかつた悔しさ、葛藤、会議で得た達成感、充実感のすべてがそれぞれの大きなステップとなっているはずです。参加した高校生の皆さん一人ひとりが得たものが今後のご活躍につながる有意義なものであったならば、微力ながらもサポートさせていただいた私たちにとって、これ以上の喜びはありません。

最後に、本書が日本における模擬国連活動の更なる普及と発展の一助に、そして、これから国際舞台に飛躍していく若い世代のよき道しるべとなることを期待しております。



グローバル・クラスルーム日本委員会
2009年度 理事長 関 龍



グローバル・クラスルームとは

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション（模擬国連）を通じて、現代の世界におけるさまざまな課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の手続規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。また、関連して、グローバル・スポンサーのメリルリンチの協力の下、国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識を深めるためのプログラムも開催されてきました。

日本でも、大学生の模擬国連は 20 年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして 2007 年、グローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第一回日本代表団の全米大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms

模擬国連委員会（Japan Model United Nations Society: JMUNS）は、日本で始めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。

1983 年上智大学において、当時上智大学教授だった緒方貞子（国際協力機構理事長／元国連難民高等弁務官）の顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている模擬国連会議全米大会（National Model United Nations Conference）への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模拡大に伴い、日本における模擬国連活動を本格化させ、名称を現在の模擬国連委員会に改名しました。

模擬国連委員会は、国際社会に貢献できるたくさんの人材を育成・輩出し、当委員会の活動に参加していた先輩たちは、さまざまな省庁や国際機関、民間企業、非政府組織、学術機関など多分野に渡って国際社会に貢献する活躍をしています。

現在、模擬国連委員会の下には、早稲田・国立・四ツ谷・日吉・駒場の 5 つの研究会と九州・宇都宮・筑波の 3 つの支部があり、首都圏だけで 30 近い大学から 300 名近い学生が活動に参加しています。

模擬国連委員会
Japan Model United Nations Society





明石 康

スリランカ平和構築・復旧・復興担当日本政府代表
／元国連事務次長／日本国際連合協会副会長

推薦の言葉

高校生が模擬国連会議に参加し、地球規模の課題について学習・議論することは大変貴重な経験です。単なる英会話の練習以上のものです。真剣で知的な学習を通じて真のグローバルなコミュニケーション能力を高めることができます。日本の学生がこのような新たな挑戦に挑むことを期待します。



緒方 貞子

国際協力機構理事長／元国連難民高等弁務官

国連は、世界各地で平和と安全の確立、人道援助や開発支援などの努力を続けています。日本からも一人でも多くの高校生が、熱意を持って模擬国連に参加し、国際情勢を学び、より良い地球社会を作っていく人材に育つよう、望んでいます。

企画名称

2009 年度 全米高校模擬国連大会への日本代表団派遣事業

期日

2009 年 5 月 13 日（水）～18 日（月）

開催場所

米国ニューヨーク市

主催団体

グローバル・クラスルーム日本委員会

内容

5 月中旬に米国国連協会の主催により開催される全米高校模擬国連大会（The 10th Annual UNA-USA MUN Conference）に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第二回全日本高校模擬国連大会（Global Classrooms in Japan 2008）にて選出した高校生を日本代表団として派遣すること。同大会には米国国内の 21 都市を含む世界 20 か国から総勢約 2200 名の高校生が参加した。

代表団構成

1) 高校生 (10 名 : 次の 5 校より各 2 名)

- ・ 麻布高等学校
- ・ 栄光学園高等学校
- ・ 渋谷教育学園渋谷中学高等学校
- ・ 渋谷教育学園幕張中学高等学校
- ・ 聖心女子学院高等科

2) 引率者 (7 名)

- ・ 上記 5 校より教諭各 1 名の計 5 名
- ・ グローバル・クラスルーム日本委員会より 2 名

派遣報告

派遣日程

4月11日（土）	インフォメーション・セッション開催
5月10日（日）	国際協力機構（JICA）訪問
5月13日（水）	NYC到着 夕食会
5月14日（木）	国連日本政府代表部訪問 国連平和維持活動局訪問 模擬国連大会 開会式
5月15日（金）	模擬国連会議 1日目
5月16日（土）	模擬国連会議 2日目
5月17日（日）	NYC出発
5月18日（月）	日本帰国

参加委員会

委員会	議題	担当高校
General Assembly 6 th Committee	Separatist State Movements	麻布高校
United Nations Development Program(UNDP) Executive Board	Global Economic Effects of HIV/AIDS	栄光学園高校
United Nations Climate Change Conference	The Road to Copenhagen	渋谷教育学園 渋谷高校
World Health Organization (WHO)	Medical Tourism and the Illicit Trafficking of Human Organs	渋谷教育学園 幕張高校
International Atomic Energy Agency(IAEA)	Preventing Nuclear Terrorism	聖心女子学院 高等科

4月 11 日

【インフォメーション・セッション】

メリルリンチ日本証券にて、渡米前の説明会および研究発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、全米大会に向けて生徒たちの気持ちも引き締まったようです。

研究発表会では、会議ごとに設定されている議題についてそれぞれが調べてきたことを基に研究発表を行いました。生徒たちによる英語での発表、それに対するフィードバックを通して担当会議・議題の理解を深めてもらいました。



1st Day

【日本出発】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。会議に向けて最終確認をする姿があった一方で、リラックスした様子も見られました。



5月 10 日

【国際協力機構（JICA）訪問】

大会前の事前準備の一環として独立行政法人国際協力機構を訪問しました。アフリカ部中西部アフリカ第一・二課に所属するアフリカでの実務経験者の方々からアフリカの現状・アフリカにおけるJICAの取り組みについて説明していただきました。派遣生が模擬国連大会で担当する中央アフリカ国についての理解もさらに深まったようです。

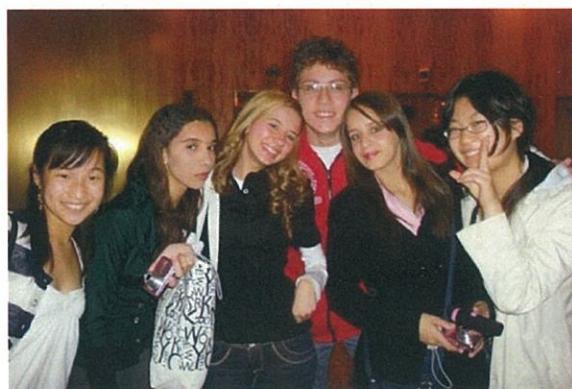
【ニューヨーク到着】

ニューヨーク到着後はホテルに荷物を置き、その後、自由時間となりました。大会に向けて休養をとるなど、それぞれ思い思いの時間を過ごしました。

Global Classrooms

【歓迎夕食会】

この日の夜は、グローバル・クラスルームのブラジル委員会、レバノン委員会の派遣生と夕食を共にしました。会議以外の場でも貴重な異文化交流をすることができました。



2nd Day

【国連日本政府代表部訪問】

国連日本政府代表部を表敬訪問しました。角大使をはじめとする日本代表部の方々から、国連における日本の取り組みについてのお話や模擬国連会議に向けた激励のお言葉をいただきました。大使から直接いろいろとお話を聞いていただく貴重な機会に高校生たちは大いに刺激を受けていました。



【国連平和維持活動局訪問】

グローバル・クラスルーム日本委員会の評議員中満 泉さんがお勤めになられている国連平和維持活動局を訪問しました。国連でのお仕事について具体的な話を聞くことができ、高校生にとってはまたとない機会となりました。



【開会式】

各国から集まった大勢の参加者が国連総会本議場に集いました。初めての総会議場の雰囲気、そして、潘基文国連事務総長のスピーチを聞くことができ、派遣生は感銘を受けていたようでした。



Global Classrooms

3rd Day

【模擬国連会議 1日目】

1日目の模擬国連会議は滞在先の Grand Hyatt Hotel で行われました。初めて参加する世界規模の模擬国連大会に緊張していたようですが、公式発言や他国との交渉を積極的に行う派遣生の姿が見られました。



4th Day

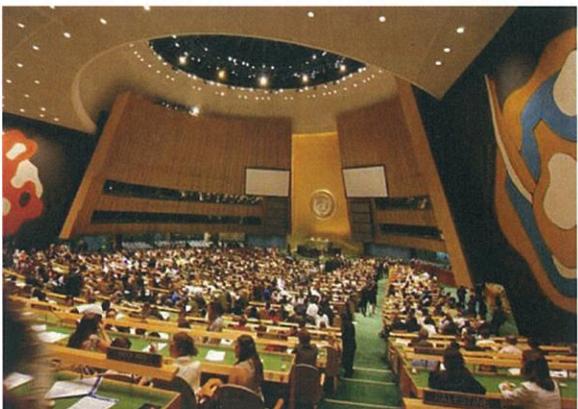
【模擬国連会議 2日目】

2日目は会場を国連本部ビルへと移して、会議が行われました。派遣生はそれぞれ他国との決議案作成に向けて最後まで粘り強い交渉を繰り返していました。本物の国連の会議場で行う実際の国連会議さながらの臨場感に刺激を受けた派遣生も少なくありませんでした。



【閉会式】

会議の興奮冷めやらぬまま、開会式と同様、国連総会本議場で閉会式が行われました。閉会式では、栄光学園高等学校と渋谷教育学園渋谷高等学校の2校の生徒が Honorable mention を受賞しました。



5th-6th Day

【日本帰国】

あっという間の 5 日間を終え、帰国の途につきました。帰国した生徒たちの表情は渡米する前よりもだいぶ大人びて見えました。それぞれ悔しさや嬉しさを胸にしながら、何かを成し遂げた達成感・充実感で一杯だったのではないでしょうか。



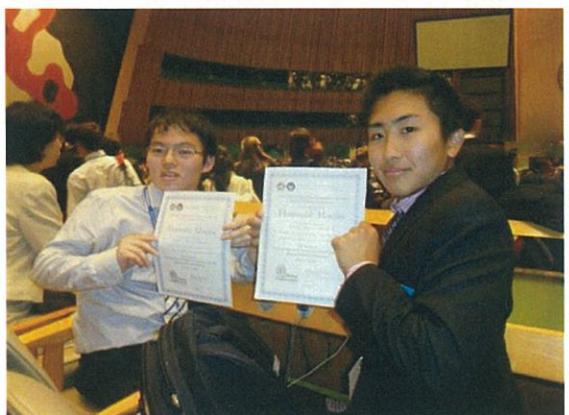
受賞

【Honorable Mention 賞】

Central African Republic

栄光学園高等学校

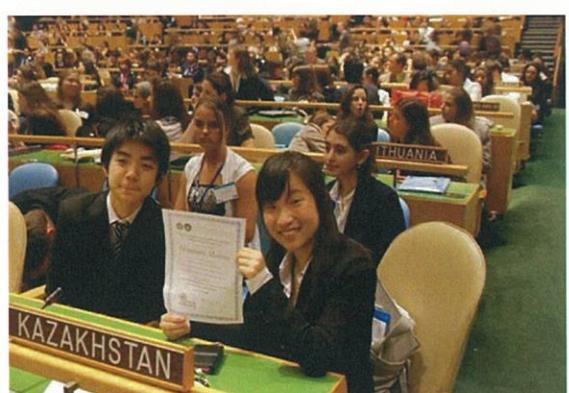
United Nations Development Program
(UNDP) Executive Board



Central African Republic

渋谷教育学園渋谷中学高等学校

United Nations Climate Change Conference



元橋 一輝

東京大学教養学部文科 I 類 2 年
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

昨年の年末に先輩に誘われて、グローバルクラス・クラスルームの活動に関わるようになつた。最初は高校生の模擬国連ということで少し興味を持ち関わってみたいと思ったが、偶然にも渡米の引率ができるという貴重な機会に恵まれ、その経験を通して様々なグローバル・クラスルームの魅力にとりつかれた。以下、今回の渡米を通して感じたことを書いてみる。

初めに、模擬国連の教育プログラムとしての価値である。模擬国連は国際問題を各国の大天使の立場から多角的に考え、スピーチをし、交渉をし、英語を使ったりと様々なスキル、考え方を身に着く。高校生の頃からこのような経験をしていくことは、貴重でもあると思うし、グローバル・クラスルームの理念である「国際社会に活躍する人材を輩出する」ということの重要性が感じられた。特に、各国から人が集まる米国国連協会主催の全米高校模擬国連大会に参加できるのは高校生にとって一生に残る経験となるだろう。また、国連の会議場を使った模擬国連会議ができるという経験もアメリカ大会ならではである。

次に、グローバル・クラスルームのつながりの強さである。インフォメーション・セッションにも派遣生へのアドバイスなどのために駆けつけてくれた派遣生 OB/OG の方々、派遣の際に引率された各校の先生方、メリルリンチ日本証券の方々、国内外を問わず、国際社会の多方面で活躍されている評議員の皆様、大学生理事、多くの皆様が協力してくださった。皆様全員の協力があって成り立った派遣事業であり、感謝してもしきれない。これからも以上のようなグローバル・クラスルームのつながりを大事にして、よりグローバル・クラスルームの発展に寄与していくことを期待するとともに、自分自身も努力したい。

最後に渡米を通じて感じたグローバル・クラスルームの課題、今後の展望について述べる。渡米をした時、アメリカでの模擬国連の活発さは、常々聞いていたものの驚いた。対照的に、

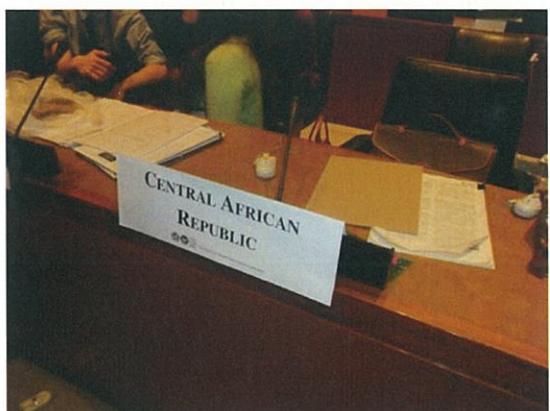
参加者報告

Global Classrooms

グローバル・クラスルームの活動によってある程度模擬国連の活動が高校レベルで普及してきたものの、まだ日本では普及が不十分である。また、全米大会にはアメリカで各州の高校から全国規模で高校生が集まっていたが、日本大会ではまだ全国規模とは言い難く、公立高校の生徒も比較的少ない傾向にある。

以上のような問題には改善の余地があると考え、広報の強化などにより全国規模に模擬国連について知ってもらって、国際社会に活躍する人材を輩出していくたい。また、これからグローバル・クラスルームの活動はそういった意味で、重要であると思う。

派遣団の引率に関わった大学生として、今回の派遣事業で得られたことはこれからの活動に還元していきたいと思う。最後にもう一度、今回の派遣事業を支えてくれた皆様に感謝を言い、大学生の引率者としての参加者報告としたい。



上西 啓 麻布高等学校 3年

今回のニューヨークでの全米高校模擬国連大会は始まる前から刺激的なイベントが盛り沢山だった。会議の前日には、国連日本政府代表部や国連PKO局を訪問、貴重なお話を聞く事ができた。角国連大使の、「日本は世界第二の経済大国であり、それに見合った貢献を国連でもしなくてはならない。」という言葉や、国連PKO局の中満さんの「国連には紛争国的一般市民を守る義務がある。」という言葉からは、自分の仕事に懸ける強い使命感を感じた。また、開会式における潘国連事務総長のスピーチの、「ここにいる誰しもが、将来の国連事務総長になる可能性を持っている。」というくだりでは、ベタだなど心の片隅で思いながらも、同時に少なからず感動している自分がいた。

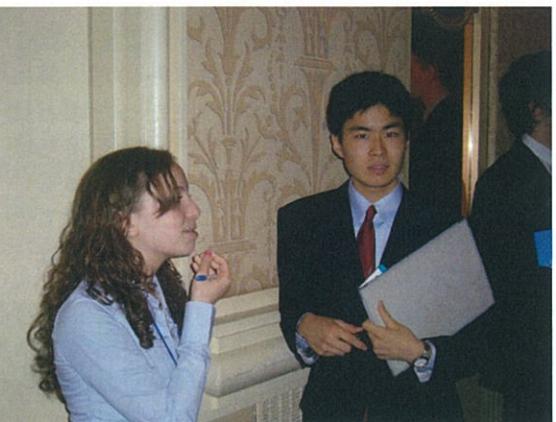
我々が参加した国連総会第6委員会は、197の国、地域と組織・394人から成る会議であり、取り扱った議題は「分離独立運動」であった。「分離独立運動」は、今まで国連で包括的に話し合われたことが無い議題であり、会議がどのような方向に進むかは全く未知数だった。どんな方向に進んでもある程度対応できるよう、それ相応の準備をして会議に臨んだつもりだったが、結局、中央アフリカのプレゼンスを発揮することはほとんどできず、会議での出来は散々なものだった。

幸運なことに、4番目にスピーチをすることができ（結局、197カ国中20カ国しか会議を通してスピーチはできなかった）、数カ国から賛同を得て、早々と決議案を書き始めたところまでは全て予定通りだった。ところが、いくつかの似通った決議案を統合していく過程で、いつの間にか我々の提案が含まれた条項は消滅してしまった。その時点で、より粘り強く、あきらめずに交渉しておくべきだったと後悔している。その後は、他の決議案に自分たちの条項を入れてもらうための交渉をしたが、うまく実を結ばなかった。また、会議中に時折、半ば無気力状態に陥り、パートナーに大変迷惑をかけてしまったことを反省している。今回の会議では、改めて自分の英語力と状況適応能力の低さを痛感させられた。

Global Classrooms

会議で良いところがほとんど無かった自分にとって、今回のニューヨーク滞在で良かった事は、個性的な8人の高校生と知り合えた事だった。様々なバックグラウンドや興味を持った同世代の高校生と意見を交換し、短い間ながらも共に時間を過ごせた事は僕の一生の思い出になるだろう。打ち上げパーティーの途中で、一人だけ爆睡してしまった事が唯一の心残りである。

今回の渡米では、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、メリルリンチの野田さん、各校引率の先生方を始めとして、多くの方々に大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。今後は、この貴重な経験を少しでも多く社会に還元できるよう、出来る限り努力していきたいと思う。



早川 英明 麻布高等学校 2年

正直に述べよう。筆者は今回のニューヨーク訪問で模擬国連とは縁を切る心づもりでいた。別に模擬国連が実は嫌いだったとか、ペアの上西に無理矢理やらされていたとか、そういうわけでは無いが、大学では麻雀だけやって平和に卒業したいと思っていたので、大学に入ったらやめる予定だった。だが、今回の訪問で、そもそも行かない事態が起きたのだ。

模擬国連があまりにも面白かったのでやめられなくなってしまったのだ、と書きたいところだが、実際は逆である。面白くなかったというのは嘘かもしれないが、あまりうまくいかなかったのだ。

うまくいかなかった原因は色々あるが、その一つは戦略をあまりにも練っていないことだろう。我々が立てた作戦と言えば「こんな感じの文言をどつかの決議案に入れてもらおう。」程度で、日本大会の時のように、「いついつまでに何をどうする」という綿密な計画を練ったわけではない。

それでも、途中まではよかった。運良く4番目に演説する機会を得て、衆目にさらされながら我々の政策を発信した。すると賛同者が集まってきて、決議案を書き始めた。しかし、その後、内容が通底している決議の存在を確認し、それらを結合することになった。すると、いつの間にかヘゲモニーを奪われ、我々の提案した文言は消えて無くなり、決議の内容も把握できなくなってしまった。議論に加わろうにも、滔々とまくしたてられる英語が難しすぎる。決議の文章も晦渋だ。筆者の語彙では対応できない。こうして初日の午後までに、举措を失ってしまった。

同室者の睡眠を犠牲にした深夜の作戦会議により（すみません）、2日目には亡羊補牢で体勢を立て直せたかに見えた。しかし、いざ2日目が始まってみると、今度もうまくいかない。別の決議案に我々の文言を入れてもらおうと頼み込んだけれども、「それはこの決議の目的に反する」ということで却下。そうこうしている

Global Classrooms

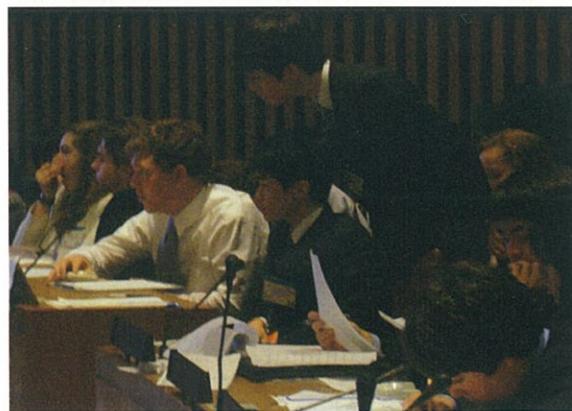
うちに午後になり、決議の審議に入るが、一つも決議案作成に関わってない我々は暇になってしまい、自分の席で端座しているだけになってしまった。

このように、我々は失敗してしまった。なので、ここで縁を切ってしまうとあまりすっきりした終わり方とは言えない。いつか会議で世界を救ってから縁を切れます。

会議中、差出人不明、ユーモラスな内容のメモが回ってきた。議長にも変なメモが回ってきたみたいで、途中でメモが禁止になった。とにかく今回の参加者にはやる気のないものも多かった。筆者が日本から持って行った携帯電話で遊んで喜んでいる御仁もいるし。まあ、よく言えば、堅苦しくなかった。

会議ではうまくいかなかったが、こんな風に日本ではあり得ないようなこともたんとあって、面白かった。その他、国連代表部訪問などのイベントも興味深かった。また、他校生の皆様と須臾の間ではあったが一緒にできることは今ではよい思い出となっております。

最後に、今回お世話になったグローバル・クラスルームの皆様、引率の先生方、その他の関係者各位に深く感謝申し上げ、末筆としたい。



小成 貴臣 栄光学園高等学校 3年

5月13日朝6時。サンフランシスコにて飛行機の小さな窓から朝日を臨む。アメリカでは一番遅い目覚め。その6000°Cの恒星が煌煌と輝いて放つ光の粒子が地球を、そして僕の心を温める。まるで自分の知らないところから予想だにしない活力が沸き上がってくるかのようだ。アメリカの広大な国土が纏う時差のせいでサンフランシスコを朝6時半に離陸しても、4時間半のフライトなのにニューヨークに着く頃には午後3時になってしまう。模擬国連に参加する前には誰でも味わうらしい、時間を奪われる感覚。今回も例外ではなかったようだ。

なぜ僕がサンフランシスコにいたかというと、JCGCの方々に無理を言って、行きのフライトの日程をずらして頂いたためだ。模擬国連に参加する前の一週間でアメリカの大学を見学に訪れ、本当に素晴らしい経験をした。評議員の皆様、寛大な措置をとって頂いたことに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

ニューヨークに着いた次の日の開会式は、かなり僕の人生の中でも数少ない貴重な経験の一つとなった。テレビでよく見るGeneral Assemblyホールで開会式を行い、潘基文事務総長のスピーチを聴くことができたのだ。夢にも見ぬことだった。「私が高校生だった頃と比べると、あなた方は意識が高い。興味を持ち続けて下さい。」と潘事務総長はおっしゃっていた。国際的な視野を持って常に向上心を持つということだ。このメッセージは僕の心の奥底にある引き出しに丁寧に、大切にしまわれた。

でも、それと同じほど、僕にとっては参加した会議自体も重要だった。僕とパートナーの富永が参加したのはUnited Nations Development Program（国連開発計画）のExecutive Boardで、議題はEconomic Impact of HIV/AIDS。会議自体に参加していた国が30カ国程度と少なかったことはとてもラッキーだった。そのため、発言機会が多く、交渉もしやすかったのだ。1回のModerated Caucusでも1~3回話すことができ、全体でも20回以上発言したのではないかと思う。Speaker's listに

Global Classrooms

より公式発言も合計で3回程度することができた。会議の概要としては、1日目の午前から僕は先進国を、パートナーはアフリカ諸国を含む途上国をまとめあげ、そのあいだの調整役に回ろうと努めた。1日目の終わりに議長がかなり国益を考えて行動しなさい、と強調していたので議長と話し合いにくいくと、僕たちの政策の方向があまり評価されないことが分かり、必死に方向転換を試みた。最終的にHonorable Mention賞を取ることができたのは、1日目から2日目の間に僕たちが国益を考えて成長を見せたことと、会議のはじめから常に議場全体を見渡し、先進国と途上国に分裂した決議案に意味が無いと主張し続け、それを一体化させようと試みた姿勢だった。これは日本大会のときから学んだことである。実は、この各国間での協調が重要だということは、模擬国連の会場からだけで学んだことではない。僕たちが国連日本代表部の角大使（実は栄光学園のOBでいらっしゃる）や国連PKO局の訓練部長である中満さんを訪れたときも、拒否権行使は冷戦が終結してからのこの20年間使われたことが無いということを耳にした。「これは国際社会が今までの経験から導きだした外交上の知恵なんです。」とおっしゃっていたのだ。このような話を、学校の授業で聞くことができるだろうか。実際に国際社会の舞台で働いている方々の口からこのような聞くことができるなんて、本当に貴重な経験をした。

また、今回の会議では日本大会とは異なり、使用言語がすべて英語だった。もちろん交渉や議論、決議案作成も英語で行う。心配していたのだが、実際の会議の中ではスムーズにアメリカ人やイタリア人の大使たちと国際問題に対する意見を言い合い、解決策を話し合い、交渉を重ねて合意に達することができた。また、アメリカ人の大使に「君たち中央アフリカ共和国の大使たちはこの会議に参加してる中で一番intelligentなスピーチをするってみんなから評判だよ。」といわれたときには驚き、本当に嬉しかった。自分が完全には使いこなせない英語という言葉を使いながら、世界中の高校生と国際問題を本気になって考える。こんな経験は絶対に他のところではできない。

振り返ってみると、本当に中身の詰まった、貴重な経験をいっぱいできた5日間だった。あ

っという間に過ぎ去ったが、決して忘れることがない経験。僕はこの模擬国連の思い出を一生胸にしまって生きていきたい。

関さん、元橋さんをはじめとするJCGCの皆さん、野田さんをはじめメリルリンチの方々、紀谷さん（栄光OBでいらっしゃる）に代表される外務省の方々を含めこの派遣事業をサポートして下さったすべての皆様、本当にありがとうございました。このご恩に対する感謝の気持ちには、僕が常に広い視野で世界を「見渡し」、常に全体の利益を考えながら自分に何ができるかを考え、行動していくことで表したいと思います。本当にありがとうございました。



Global Classrooms

富永 裕貴

栄光学園高等学校 3 年

模擬国連の全米大会に参加できて本当に良かったと思う。1週間たった今思るのは、今回の派遣事業に参加したことを通じて、自分の目標に着実に近づけたという事だ。

全米大会で得られたことは、いかにして英語のスピーチ、討論、また交渉を通して味方を増やすか、集団を取りまとめるか、あるいは存在感を発揮するか。こうした力は常に必要とされる。さらに英語で行われる議事は進行や移り変わることが早いため、状況を素早く正確に把握できる力、さらにその場で発言もしなければいけないとなれば、議題に関する事柄や担当国の立場に対する広範な知識も必要になる。全米大会が日本の大会と明らかに異なるのは、パブリック・ディベートのような形をとる、すべての大天使が席に着いた状態での moderated caucus が長くとられることだ。日本の大会では席をはずして好き勝手に動き回って交渉できる unmoderated caucus の時間が圧倒的に長いが、この違いがもつ意味は非常に大きい。例えば全体を 10 分、1 回につき 1 分などと決められた時間の枠内で、一定の議題について発言を希望する大使がスピーチを行っていく。自国の立場や政策を主張するだけでなく、前に出た発言に対して反応する。これが繰り返されることで、議論が深まり、会議全体をよりよいものにしていたと思う。この moderated caucus は日本人の参加者として非常に面白かったし、いい経験だった。なにしろ、外国語である英語で非常にテンポよく議論が進んでいくなかで、自国の存在感をアピールするためにより多く発言しなければいけないし、またその内容にも十分気を配らなくてはいけない。議論にコミットしていることを示すために、争点を洗い出す、今までの争点に対して解決策に近いアイデアを出すなど、そこまで実際に自分が必ずしもできていた訳ではないが、こうした生き生きとした議論の場をアメリカで経験できたのは非常に新鮮で、会議の中でもっとも有意義な部分だったと思う。具体的に参加者として自分が参加した会議について少し書いてみたいと思う。AIDS の経済的影響という議題について、割と小さな会議に参加したが、全体の大天使の数が少なかったことで緊

張感のある議論が最後まで続き、前述した moderated caucus の時間が特にそうだった。自分がやったことと言えば、中央アフリカ共和国の大天使だったのでアフリカの国をまとめることが、常にそのグループではリーダー的存在であること、また友好国を広げること、立場の異なる国々が集団を作つて別れようとするのをまとめることが、そして最も重要なのが、自分の国が、以上のような会議において不可欠な役目を担つている存在であるということを、議場に対して分からせることである。他の大使からそうした不可欠な存在として認知されることで、存在感が自然と増し、その役目を果たすべく行動するのが格段にやりやすくなる。このことは前述した議論にコミットすることと同じくらい大切で、自国の政策をただ全体に訴えるよりも、効果的なスピーチをすることができる、総じて有益である。今回参加した会議では、幸運にも "honorable mention" という優秀賞にあたる賞をいただくことができたが、こうした事を少しでも実践し、議場のまとめ役として他の大使との違いを作りだそうとしたことが評価につながったのだと思っている。

改めて、模擬国連の全米大会に出られたことは非常に大きかった。そこで会議がより新鮮に感じられたのは、やはり普段そうした英語での活発な議論を行う機会が少ないからだと思う。しかし、普段から少なからず全体に対して主張をおこなうレッスンを積んでいるアメリカ人や、他の外国人に比して国際的な舞台において日本人のウィークポイントとなっているのが、この議論する力ではないか。具体的には、議論の場で自分の味方を増やし、正当性を証明し、存在感を発揮する力。勿論使用されるのは英語である。僕の将来の目標はまだ定かではないが、自分の専門性を磨いた上で自分が選んだフィールドにおいて国際的な舞台で存在感を発揮できる存在でありたいと思っている。その上で今回の経験は着実に進歩につながった。今、日本人の高校生の中で前述したような従来の日本人があまり持ちはなかつた力を持つ存在がもっと必要になるのではないか。現状ではまだその力は十分にのばされていないと思う。やはり、もっと多くの高校生に模擬国連のような活動に挑戦して欲しいし、もっと多くの高校生に今回の派遣事業のような機会が与えられるべきだと考える。

Global Classrooms

栗脇 志郎

渋谷教育学園渋谷中学高等学校 3 年

担当国：中央アフリカ共和国会議：気候変動会議（UNFCCC）

テーマ概略：“The Road to Copenhagen”今年 12 月にデンマークの首都コペンハーゲンで実際に行われる COP15 で議論するべきこと、決めるべき政策を議論する。COP1 からはじまり、京都での COP3、パリでの COP13 などを経て、COP15 は京都議定書の第一期間が終了する 2012 年以降の変更・新たな枠組みを決定する、という重要な会議である。当模擬国連では 1 日目には大陸別に（アフリカ、アジア、南北アメリカ、東ヨーロッパ（ロシア等も含む）、西ヨーロッパ）別れ議論し大陸ごとの決議案を用意し、2 日目に大会議場で複合的な決議案を作つた。

結果：中央アフリカ大使がスポンサーとなった国は両日とも可決されたただ一つの決議案となった。Honorable Mention（賞）をアフリカ会議内で受賞した。

戦略要旨：中央アフリカ共和国（以下中ア）は、南にコンゴ熱帯雨林を持つコンゴ民主共和国、北にサハラ砂漠が大部分を占めるチャドやスードンを隣国に持つ。国土は日本の 1.4 倍あるが人口・GDP・衛生状況・インフラ整備はともに最低ランク。しかるに化石燃料の輸出入・国内消費量は皆無に近く、よって当会議で問題となる二酸化炭素の排出量は微々たるものである（全世界の 0.1% に満たない）。加えて圧政と部族内乱に悩まされている我が国の当会議での最大の危険は、最初から関心を払われない、ということであった。実際、本物の中アの知名度は非常に小さく中ア政府も気候変動に関して何か言うほど余裕はない。ただし模擬国連ではその態度をそのまま模しても意味がないので、そこで僕たちの工夫が必要になってくる。

いったんテーマ全体を俯瞰してみよう。気候変動について言えば世界の国々は 3 つのグループに分けられる。先進国（アメリカ、デンマーク）・開発途上国（中国、サウジアラビア）・

貧困国（=Least Developed Countries, LDCs, 中ア、ツバル）。よって、当会議で考えられるテーマは、各国の削減目標をどうするかに加えて、多国間の援助をどういう形で行うかである。更に、この会議では京都議定書の改善を考える場であるから、京都議定書が定めた 3 種類の援助方法：排出権取引、クリーン開発機構、共同開発（あわせて京都メカニズム）が議論のポイントとなる。

アフリカ諸国は当然援助を受ける側であるが当然先進国からすればアフリカに投資する意味（incentive）は少ない。たとえば排出権取引においても、排出量を抑えなくてはならない国（ex.日本）は、治安が不安定な中アで植林活動をするよりも、隣国で国土が広大なロシアに対して技術提供をして排出権を得る方がはるかに簡単なのだ。つまり中アとしては、先進国と自國の双方にとって利益のあるプロジェクトを提案しなくてはならない。

ポジションペーパー締切の数日前、運よく我々は Black Carbon なるものの情報をインターネットから得た。Black Carbon（以下 BC）は、いわゆる家庭から出る毒性のススで、これが健康被害だけでなく多大な温室効果（CO₂ に比べて約 6 割）もある、ということが最近の研究でわかつてき、ということだった。しかも BC は、発展途上国からしか発生しない。なぜならば、先進国ではススを発生初期に取り除くフィルター技術が発展しているからである。ということは、中アにとって BC というアイディアを利用する理由・利点は 4 点。①自分たちが出している、②標準的なストーブで簡単に排出を削減できる、③CO₂ より大気圏での滞空時間が短いためすぐ気候変動への効果がある、④BC は多大な健康被害を出しているため、これを取り除くことで中アの重要課題：悪衛生・貧困を軽減することができる。→こうして我々は、会議に参加する上で、先進国に媚びたり、ただただ排出国に注文をつけるのではなく、自国の利益と気候変動という地球的課題を考慮した、いいアイディアを得たのだと思う。

会議の感想：1 日目のアフリカ会議では、40 ヶ国の中で意見を十分に発信し、決議案の作成を担当することができた。「個人の生活」への配

Global Classrooms

慮を特徴として掲げ、BCを例に含めた総合的な決議案が通り、回りの反発を最小限のとどめられたのは、準備期間で考えに考えを重ねたおかげだと思う。対して2日目は、180ヶ国の中で、アフリカで一致団結して主張を通す必要があった。が、初期段階からアジア班に数で押され、他のグループを説得することはできなかつた。会議場は混乱し最終的には全大陸の意見をまとめた決議案が複数（つまり、内容的にはほとんどおなじもの）あがつた。どの大陸も途中でバラバラになり、後半からは何をしていいのかよくわからなくなつた。2日目のほとんどは「誰と組み、誰が賛成してくれるか」の議論であり、テーマの内容に関する議論がほとんどできなかつたのが残念だった。

全体の感想：実際に国連の総会議場で、議論ができたことには満足している。とても貴重な経験だった。また、自分たちの準備してきたことが無駄にならず、同盟国の関心を引くことができたことにも、加えて、Honorable Mentionを頂いたことも満足である。ただし、2日目の会議で、自分たちの決議案が通ったとは言え、言いたいことを十分に言えなかつたのは少々後悔が残る。実際決議案が通ったと言っても、全員分コピーする時間がないという理由で議長が読み上げたものを180ヶ国が投票したにすぎない。“私たちの2日間の成果はこれです”と言って誰かに見せられる“もの”はないし、自分が信じていたBCのアイディアは、決議案に入ったものの、入れたリーダー国（ラオスやカザフスタン）がそれを理解していたかどうかは怪しい。（BCの反応は悪くなつた。時間をかけて説明したアフリカの大使は、最後まで、BCのアイディアは唯一この会議の中でちゃんと意味が通っているものだ、と賛同してくれていた。）この会議では色々な人と接した。ラオスやメキシコ大使のように二日目にアフリカや他国を飲み込み、決議案を形だけでも書き上げた人や、政策はおろか自分の国が地図のどこにあるかもわからない大使もかなりいた。模擬国連では国際問題への関心、思考力、文章力、スピーチ力、交渉力、リーダーシップなど本当にありとあらゆる能力が問われる。2日間、苛立ちを感じながらも当会議に全力で取り組めたのは、誰よりも、自分のためになったと思う。

藤井 萌子

渋谷教育学園渋谷中学高等学校 2年

2日目の午後、ラオス大使と話した後、私はふと思った。「模擬国連って本当に意味があるのか？」

国連の総会ホールで192もの国の大使が集まり、たった2日間で国際協力を実現した友好的な決議案が本当にできるのかという疑問が頭をかすめた。環境問題会議では、まず初日は地域ごとの会議、2日目は全加盟国でコペンハーゲンに向けた道筋のプランを作成した。

1日目、資料とパソコンを持って会議場に行ったら、なんと机がなくて椅子しかない。会議監督が話し始めてすぐパソコン禁止と言い渡されショックを受けた。会議監督は日本大会より権限を発揮できるんだ、とすごく驚いた。会議の初めはコーラスで自分の考えをわかってもらえるか不安でびくびくしていたけど、次第に場の雰囲気に慣れてきて、アフリカのほとんどの大使とコミュニケーションを取れるようになった。特に隣国のコンゴ共和国とは仲良くなり、一緒に周りの意見を中央アフリカの決議案にまとめることができた。そのうち、私たちの意見に賛同する国がどんどん増え、いつの間にか私は真ん中で各大使の意見を調整していた。

決議案の内容は大きく4つに分かれていた。Adaptation（適応性）、Mitigation（緩和）、Technology（技術）、Financing（資金）。会議の初日に進めたことは、その4つのプランに各大使が言いたいことを補足し、「中央アフリカの決議案」から「アフリカの決議案」に変えることだった。そして、翌日までにその「アフリカの決議案」を「世界のための決議案」に変えることが、最終のゴールだった。初日はそのゴール付近にたどり着けたとは思うが、2日目はうまく進められるか不安だった。

2日目が始まった時点では、アフリカの各国で意見はまとまっていたが、いつの間にか私たちの意見はラオス大使とクウェート大使に飲まれていた。そういう状況はある程度予想はしていたが、彼らが決議案を作るにあたって手伝お

Global Classrooms

うと申し出ると「あなたをメジャースポンサーにしたからいいでしょ、アフリカ代表。協力してもらわなくともいいわよ。」と返されて、さすがに腹が立つた。お昼時間中、どうにかアフリカ独自の決議案を作れないかと再度交渉したが、その2つの国がすでに先手をうついたため、もう時間がないことに気づき、無理にアフリカ独自案を作るよりは、最終的に良い案できたほうがいいと考えて、全力でラオス大使のサポートに回つた。会議の後半はラオス大使からの決議案をアフリカ各国に説明し、中央アフリカの決議案で重要視してもらいたい部分を主張しながら過ごしたが、やっぱり心の中のやもやは消えなかつた。モデレートコーラスでは、1回しか中央アフリカのプラカードは呼ばないし、主導権を取るか取らないか不公平だという気持ちがくすぶつた。

午後になり、192ヶ国が集まつた中、真剣に議論に参加しているのは少数だと感じた。まず、アメリカが出席していなかった時点で、コペンハーゲンに向けて実行可能で現実的な決議案を出すのは厳しかつた。主導権争いや内容の事でもめ、ヨーロッパはヨーロッパの意見、アジアはアジアの意見、アフリカはアフリカの意見を押し通そうとする意味があるのか？そもそも環境問題を解決するためには国際協力が何よりも重要で、自分のアジェンダを通して国がいればすべてが壊れてしまうことも、過去から学んだはずだ。

では、なぜ私たちは同じ目標に向かって解決策を作ろうとしているのに、「これをやれ」と他人から命令されるとやる気が失せてしまうのだろう？やらされる立場に立つと、人は独自性を主張して自分の名前が入った決議案を作り、結局同じ内容のものを押し通そうと抵抗する。同様な人は実際何人もいた。同じ内容なのに協力するのは嫌だ。自分の意見が大きな車の一部の歯車になるよりは、独自案で目立ちたいという気持ちが明らかに見えた。大人数の会議に参加することで、それぞれの国とコミュニケーションを取り協賛を得ることは、どれほど難しいかよくわかつた。そして、一言で国際協力をすればいいという発言は、どれほど安易で単純なステートメントか痛感した。

この経験を踏まえて、今後の参加者には次のようにアドバイスしたい。まずは日本大会でモデレートコーラスを増やすこと。全米大会では、インフォーマルよりもモデレートの方が多く、モデレートに慣れていない私たちは最初出遅れた気分になった。今後挑戦する人たちにはその点を練習してもらいたい。もう一点、議長はもっと権力を使ってもいいと思う。アメリカ大会では議長は会議がより活発に動くように、大使にモーションを与えていた。議長はスピーカーズリストの管理やモーションをとるだけではなく、会議の流れをつかみもっと友好的に時間を配分することが一番の役割であると思った。逆に議長は大きな権力を行使することもあるのだということはわかっていたほうがいいと思う。

最後に、私にとっての模擬国連の意味とは。模擬国連はどれほど楽しくてやっていて幸せか語ってもちょっと意味がないが、本当にそのようなのだ。環境問題、子ども兵の問題に関して、高校生が解決するには無理がある。でも無理だとわかっていても、その中で何ができるか。様々な国際問題に対するアイデアを、私たちの世代がリードするときにどう使い、現実に変えるのか。そう、そこで生まれる国際意識というものが、模擬国連の意味じゃないかなと思う。そしてその国際意識を巡って繋がる協力こそが、地球と人類を救う源になると思う。



Global Classrooms

下 開之

渋谷教育学園幕張中学高等学校 3 年

今回の全米模擬国連に参加できて、本当に貴重な体験ができました。学校の忙しい時期の中で、アメリカという違う環境の下での模擬国連はいろいろと大変なこともありましたが、それ以上のすばらしい経験ができる大変うれしく思っています。

私たちが参加した WHO の会議には、中央アフリカの代表として「臓器の違法な取引・医療観光」の議題を持って臨みました。前に参加した日本大会では 50 チーム 100 人の人数に比べ、今回の会議は 144 チーム 288 人で行ったため雰囲気が大きく異なり、1 日目はとても戸惑いました。さすがに人数も多いとそれぞれの国の事情や主張したい部分が聞き入れられにくかったのですが、非公式討論のときには大きなグループより多くの小さなグループが結成され、個人の意見が重要視されているように感じました。2 日目は決議案の書き上げ・そして似ている案との合併・交渉に取り組み、12:30 というタイムリミットまでに決議案を出すのにどのグループも必死でした。しかし決議案として通るかの審査が厳しく、19 個提出された決議案のうちフロアに公式に導入されたのは 4 個でした。そのうち 1 個が決議として通り、最終的には臓器取引の禁止という方向で 2 日間にわたる議論の結果が出ました。

会議の間はみんなまじめに取り組み、自国の立場を守りぬき周りに流されず自分たちの意見をはっきりと主張していました。しかし休憩の時間や会議が終わった後もほかの学校との会話が続き、会議のことだけでなくお互いの住む場所、学校生活、文化のことなどを普段の友達といふような感覚で話せたのが印象的でした。最初の夜の食事会も、ブラジルとレバノンからの派遣生徒との交流は貴重な体験でした。全米模擬国連の出場までに 1000 人以上の選抜を勝ち抜いて、国の代表に選ばれるような人と遠慮なく意見を交わせられるのもこの大会だからこそできることだと思いました。そして生徒だけではなく、日本政府代表部や PKO の中満さんなど、普段では会えないような人の話を聞くことができたのも本当に貴重な体験になりました。

今回の模擬国連に参加するにあたり、お世話になったグローバルクラスルーム日本委員会の皆様、メリルリンチ証券の皆様、調べ物をする上で手伝ってくださった各機関の皆様、そして引率をしてくださった先生方には本当に感謝しています。そして、代表団として一緒に模擬国連に参加したみんなにも感謝しています。力を合わせてだからこそできたことだと思います。本当にありがとうございました。これからもこの経験を生かして、いろんなことに挑戦し続けたいと思っています。



Global Classrooms

馬場 潤子

渋谷教育学園幕張中学高等学校 3 年

模擬国連の会議に参加する度に決まって思うことがあります：「疲れた。もう二度とやらない。」それほど会議は大変です。

準備期間には膨大な資料を読み、日本人の私から見ると全くわけのわからないめちゃくちゃに思える政府の立場に立って政策立案を考え、会議当日は自分の準備不足を後悔し、周りの優秀な高校生を説得してまわるのに苦戦し、思いどおりに会議が進まない事に苛立つ。参加している間は楽しいの「た」の字も浮かんできません。

それでも気づけば第 1 回、第 2 回の日本大会に参加し、今回は全米大会にまで参加させていただきました。

理由は 1 つ、面白いのです。

模擬国連でリサーチすることは学校では取り上げられない事、おそらく受験には役に立たないであろう事がほとんどです。しかし、会議に一大使として参加する以上、知らなければならない大事な事ばかりなので、試験勉強よりも必死になって取り組みます。知る必要に迫られると、不思議な事に、調べた事はどんどん頭に入つて来ます。だから、楽しい。普段の勉強をしている時は「将来これは役に立つのだろうか」とつい疑問に思うことがあります。しかし、模擬国連のリサーチではそれがないです。調べた事はすべて現実に今起きている事や自分の参加する会議の内容に直にリンクしてきます。中央アフリカの街の衛生環境について知っていてもなんの役に立たないかもしれません、知る事で世界が身近に感じられるようになり、同時に自分の今の世界の狭さに気づかされます。そしてだんだん関心の分野が広がります。

会議中、思いどおりに進行できないこともまた貴重な経験になるでしょう。私は国連というのはすごい機関で、政治は政治家に任せてれば何とかなると考えがちでした。しかし、模擬国連に参加して外交がいかに面倒で、大変で、もどかしいものか実感できました。リサーチ中、

国連の実際の決議を読んで「何にも決まってないじゃん！」と腹立たしく感じる事は何度もありました。だからこそ私たち一人一人が社会問題に目を向け、積極的に政治に参加して行く必要があるのだとも感じingようになりました。

全米大会はとても充実していました。

会議では私たちの作った決議案が、印刷が間に合わないというだけの理由で投票にかけられず、残念でしたが、最終的には私たちの主張が十分に盛り込まれた決議が通りました。今回、世界中から集まった同年代の人達と「決議」という形で一つの理想を共有できた事は大きな喜びでした。

角大使、中満さんのお話はもちろんのこと、他の日本派遣生や他国の生徒との交流も貴重な体験になりました。またブラジルとレバノンからの派遣生徒との食事会では、高校生同士ならではの遠慮のいらない活発で大胆な意見の交換が楽しめました。「模擬国連に参加する生徒はとても優秀で、みんな自分の能力に相当するプライドをもって会議に臨んでいる。その上で、会議で大切なのは互いにプライドを傷つけ合う事なく、気持ちよく意見の擦り合わせができるような交渉を皆が心がけることだと思う。」レバノンから来たエルサのこの言葉は、まさに私が模擬国連に参加する度に思う事でした。彼女をはじめレバノンから来た派遣生徒は皆、レバノンから来たというだけの理由で入国前別室に通され、スーツケースの中身を隅から隅まで全てチェックされる：私はそのような差別は経験せずに済んでいる：さまざまのことが合わさって、エルサの言葉は私の心に強く残りました。

今回の渡米を可能にして下さったグローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、メリルリンチ日本証券様、リサーチでお世話になった各機関の皆様、そして学校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。また、一緒に会議に participated 仲間にも感謝しています。ありがとうございました。大学に入っても、是非模擬国連活動を続けて行きたいと思います。

Global Classrooms

木内 由佳

聖心女子学院高等科 3 年

2月にグローバルクラスルームから全米大会への参加の知らせが送られてきたとき、私は非常に驚いた。賞をとったからといって、まさか参加できるとは思っていなかったからである。そして同時に焦りの気持ちもこみ上げてきた。全日本大会の時の、準備に見舞われた忙しい毎日を思い出したからである。そしてサポートペーパーから始まり、ポジションペーパー、そしてスピーチを考えるなど忙しい毎日が始まった。そんな中、渡米 2 週間前ほどに新型インフルエンザの流行の話を聞いた。私はそのとき正直行きたくないと思った。それはインフルエンザにかかりたくないというより、自分の英語に自信がなかったからである。しかし最終的に行くことになり、会議を終えた今振り返ってみると、あのときに参加をやめていたら一生に一度しかないほどの貴重な経験を逃していたのだ、と思う。それほど今回の全米大会への参加は私の今までの人生の中でとても大きな出来事であった。

会議 1 日目、部屋に入った瞬間、私はとても緊張していた。世界中から集まった高校生たちの中で、どのように会議に参加したらいいか分からなかったからである。そして会議が始めるとすぐに大使同士のメモ回しが始まった。私たちにはメモではなく、ただ他の国から回ってきたメモを渡すだけで、取り残されている気持ちだった。しかしスピーチをした後に多くの国から賛同を得ることができ、メモが回ってきてやっと会議に参加しているという気持ちになれた。このとき、積極性が会議において大事である、ということを実感した。

2 日間の会議の中で一番印象的だったのは、スピーチをした時である。スピーチは事前におくつものパターンを作成して会議に臨んだが、結局スピーチの前に変更して作ったものを読んだ。200 人以上の前に立ってスピーチをするので緊張すると思ったが、全日本大会で「ベストスピーチ賞」をとり自信をつけた私は、心配していたよりも余裕をもって堂々と話すことができた。このように全日本大会、全米大会というステップを踏んで自分が完成していくのが感じ

られた。

全米大会と全日本大会では異なる点がいくつかあった。その中で一番戸惑ったのが、決議案を議場に提出した後に、全日本大会のようにスピーチをするのではなく、決議案を読み上げ、質疑応答ができることがある。他の大使たちは配られた決議案にすばやく目を通し、現実的かどうか疑わしい点を見つけ質問していた。私はこのとき、黙って聞くことしかできなかった。何を質問したら良いのか短い時間の間に見出すことができなかつたからである。このことは現在全米大会を振り返って一番後悔している点である。しかし、この後悔は必ず次の成功に変えられるということを、全日本大会と全米大会の両方を経験した今の私は実感した。

ニューヨークに行くまでの準備の間、私が一番心配していたことは英語である。海外に 8 年住んでいたとはいえ、「核テロ防止」のように専門的なことで英語を使うことには自信がなかった。日本語で考えた中央アフリカの政策を英語で説明し、他の大使と交渉できるかどうかとても不安だった。しかし最初のコーカスからたくさんの大使と話すことができ、心配していたよりも自分の英語をコントロールすることができた。また、会議の途中にアメリカ人の大使に「あなたの英語上手ね」と言われたとき、とても嬉しく思い、ほっとした。将来英語を使って世界で仕事をしたいと思っていた私は、今まで自分の英語にとても不安だった。日常会話ができるても意味がないからである。しかし今回の会議で言われた言葉で、私は自分の英語は世界で通用するのだ、という自信がついた。

私は全米大会に参加し、多くの成功や失敗を経験することでたくさんのことを学んだ。その中でも一番今後に生かしていきたいと思うのは、積極性である。そしてこの積極性の裏にあるのは自信である。この会議で手に入れた自分への自信によって、失敗しても積極的にさまざまに立ち向かっていけることを感じた。そして模擬国連大会の楽しさを将来もっと味わいたいと思う。

Global Classrooms

三溝 彩希子

聖心女子学院高等科 3 年

NY 大会での経験は、どれもこれも刺激的なものでした。開会式で国連の総会議場に足を踏み入れたときの、なんとも形容しがたいあの緊張と興奮の入り混じった感覚は、今でも忘れられません。総会本会議場のスケールの巨大さは言うまでもなく、実際にこの場所で、各国の大使が何千何億という国民の未来を背負って必死に動いているのだと実感すると、ただただ圧倒されてしまいました。開会式では国連事務総長である潘基文氏のスピーチを聞くこともでき、こんな場面に自分が立ち会えていることに対する感謝の気持ちでいっぱいになると同時に、潘氏がおっしゃっていたように「この中から未来的な国連事務総長ができるかもしれない」のだと思うと、自然と身が引き締まるのを感じました。

会議においては、まず会議形式が日本大会よりも遥かに充実していることに驚きました。Moderated caucus によって、議場全体で議論の流れを決めていくこうとしたり、決議案を統合していくこうとする動きがあり、「世界全体で協力し合える関係を築こう」という意識がとても高かったと思います。決議案に関しては、提出された決議案を議場全体で 1 つずつ徹底的に検証するようになっており、たしかな議論がなされていました。残念なことに私たちの提出した決議案は、時間の都合上、審議にかけることができませんでしたが、決議案を作成するにあたって「語句の決定」の段階から皆が納得のいくまで議論を重ねたりと、より本物の国連会議に近い、緻密な作業をすることができました。

しかし、roll playing の面が多少なりともおざなりになっていたのが気になりました。模擬国連とは本来、参加者が各国大使になりきって担当国の国益を追求しつつも、他国の立場を理解しながら交渉を行い、問題解決を図っていくプログラムであるはずです。皆が自国の立場にのっとって真剣な交渉を行うからこそ、国際社会における理想と現実の接点を見出しができるのだと思っていた為、インドなど、交渉の鍵となるような国がはじめから核軍縮や核物質の管理強化に協調的な姿勢を示していたことは残念でした。

また何よりも、自分の英語力の甘さを痛感し、

会議終了後は情けない気持ちでいっぱいになりました。皆で議論をかわしている間にも、ぱつと閃いたアイデアをうまく言葉にすることができず、自分の思いを結局きちんと伝えられないまま会議が終わってしまったというのは本当に悔しかったです。国連 PKO 局を訪問した際にも「英語力は絶対必要条件であり、決して十分条件ではない」というお話を伺い、中身があつてもそれを伝えるツールがなければ、またツールがあつても中身がなければ何の役にも立たないのだと思い知らされました。

今回この NY 大会に参加して様々なことを学びましたが、何よりも大切なものは、やはり仲間との信頼関係なのだと確信しました。模擬国連を通して、お互いに信頼し、尊敬し合えるような仲間と一緒に 1 つのものをやり遂げられたことを、とても幸せに思っています。将来どんな道に進もうとも、この思いだけは確かなものとして胸に抱き続けたいです。

最後に、昨年の全日本大会のときからずっと一緒に頑張ってきたペア、準備の段階からサポートして下さった JCGC の皆さん、先生方、メリルリンチの方々、NY 派遣生のみんな、そして IAEA の会議に参加していたすべての大便に感謝いたします。ありがとうございました。



支援協力団体一覧

本派遣事業の実施にあたり多くの団体からご支援とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。

(以下五十音順、敬称略)

後援

外務省

文部科学省

国際連合広報センター

日本国際連合協会

国際連合大学

協賛

メリルリンチ日本証券

武田薬品工業

支出

渡航費	1,650,000
宿泊費	900,000
会議費他	50,000
合計	2,600,000

会計報告

本派遣事業は、メリルリンチ日本証券ならびに武田薬品工業により賄われました。ご支援いただき心より感謝申し上げます。

収入

メリルリンチ日本証券 寄付	2,100,000
武田薬品工業 寄付	500,000
合計	2,600,000

2009年6月9日
グローバル・クラスルーム日本委員会



グローバル・クラスルーム第三回日本代表団の皆さん、お疲れ様でした。昨年秋の全日本大会において成績優秀者として選抜された「日本代表」の名に違わず、ニューヨークでも立派に議論を尽くした皆さんに改めて敬意を表します。また、今回の派遣事業を様々な形で支えてくださった関係各位には改めて御礼申し上げます。おかげさまで、今回も成功のうちに事業を終えることができました。

皆さんが参加した今回のUNA-USA Model UN Conference NY大会（全米模擬国連大会）は、来年から改装工事に入る国連ビルでの当面最後の模擬国連大会で（総会会議場は来年以降も使用できるようですが）あったと同時に、第10回目の開催という節目の大会でもありました。記念大会にふさわしく、過去最高の20カ国から高校生が集まる大イベントとなりました。

メリルリンチは、米国国連協会とともに本プログラムを創設し、以来、グローバル・スポンサーとして支援をしてきました。当初は米国国内の教育プログラムとして始まったグローバル・クラスルームもいまや世界各国に広がるに至り、メリルリンチの社員も様々な場所で本プログラムに従事しています。

グローバル・クラスルームが10年の長きにわたって関係者の支持を維持・拡大できているのは、このプログラムが持つ様々な特性が時代の要請に見事にかなっているからに他なりません。全米大会はその最たるものであり、世界中から集まった様々なバックグラウンドを持つ人々が、自分の意見とは必ずしも一致しないかもしれない国を代弁しながら議論を展開し、協調への道を探っていきます。その過程で参加者は、まずは自分が担当する国を、そして次に交渉相手となる国をといったように、二重三重に「他人のことを理解する」ことが求められます。

こうしたコミュニケーションは生活の根幹ともいえますが、グローバル化が進展する中で、それは単なるダイアログの域を超え、高度な技

術が要求されるようになってきました。その技術を学ぶことができる場こそがグローバル・クラスルームなのです。

昨年秋の全日本大会以来、皆さんはたくさんのこと学んだはずです。これを機にさらに多くのことを学んで欲しいと心から期待しています。皆さんが将来、国際社会で活躍され、そしてそのときにこの経験が生きるのであればこれほどうれしいことはありません。

メリルリンチ日本証券

グローバル・クラスルーム 日本委員会

(以下順不同、敬称略)

アドバイザリー・ボード

明石 康
(スリランカ平和構築・復旧・復興担当日本政府代表
／元国連事務次長／日本国際連合協会副会長)

小林 いずみ
(多数国間投資保証機構(MIGA)長官)

評議会

星野 俊也(議長)
(模擬国連委員会創設者・OB／大阪大学 大学院公共政策研究科教授／前・国連日本政府代表部公使
参事官)

紀谷 昌彦
(模擬国連委員会 OB／外務省国連企画調整課長)

中満 泉
(模擬国連委員会 OG／国際連合平和維持活動局政
策・評価・訓練部長)

ジェイソン・ケンディ
(メリルリンチ日本証券広報部長)

野田 司
(メリルリンチ日本証券広報部ヴァイス プレジデント)

柿岡 俊一
(埼玉県立浦和第一女子高等学校 教諭)

竹林 和彦
(渋谷教育学園渋谷中学高等学校 教諭)

米山 宏
(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

関 龍
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事長／
獨協大学)

長崎 秀史
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事／
早稲田大学)

理事会

関 龍(理事長)
(獨協大学法学部国際関係法学科 3年)

長崎 秀史(研究担当)
(早稲田大学教育学部教育学科教育学専攻教育学
専修 3年)

小檜山 歩
(国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科 2
年)

元橋 一輝
(東京大学教養学部文科 I 類 2年)

渡邊 聖世
(2008 年度 グローバル・クラスルーム日本委員会
理事長／駒澤大学)

木村 真紀葉
(2008 年度 グローバル・クラスルーム日本委員会
研究担当／東京外国语大学)

事務局連絡先

E-mail: info@jcgc.jp

おわりに

国連は国際社会の縮図です。それは、世界192の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、まさに「人類の議会」(国連の歴史的展開を描いたイエール大学のポール・ケネディ教授の著作のタイトル)と言えるものです。国連での会議外交では、各国の国益が否応なくぶつかり合う場面にも多く出くわします。ですが、同時に、各国が自らの国益を見極めながらも、国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、創造的・建設的なプロセスが繰り広げられる場でもあります。こうしたプロセスで物を言うのは、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考え方を異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これから学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方によらず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からの厚意とメリルリンチ社の支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣事業は今回で3回目となりました。今回は特に新型インフルエンザの感染が懸念される時期の渡航となりましたが、代表団にご参加

くださった各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連委員会による運営が不可欠ですが、関理事長以下、きわめて誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。さらに、厳しいビジネス環境にあっても本事業への支援をお続けくださっている協賛団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会
評議会 議長 星野 俊也

参考

関連リンク

米国国連協会／UNA-USA
<http://www.unausa.org/>

グローバル・クラスルーム／Global Classrooms©
<http://www.unausa.org/globalclassrooms>

2009 年全米高校模擬国連大会／
UNA-USA Model UN Conference 2009
<http://www.unausa.org/unausamun>

模擬国連委員会／Japan Model UN Society
<http://jmun.org/>

グローバル・クラスルーム日本委員会／
Japan Committee for Global Classrooms
<http://jmun.org/gc/>

メリルリンチ日本証券／
Merrill Lynch Japan Securities
<http://www.japan.ml.com/>



グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms